

岡光先生退官に寄せて

坂本貴志

岡光先生がこの春、山口大での30年を含めて、40年間近くにわたる教師生活を終えられる。これを機に、先生にお世話になった一人として、先生の人となりを伝えるべく、僭越ではあるが後輩同僚を代表して寄稿をする次第である。

* * *

岡光先生が学者としてスタートを切られたのは、略歴から知られるとおり、故郷山口から遙かに遠い北海道の地であった。飛行機がまだ縁遠かった時代に、上野で夜行を乗り継ぎ、青函連絡船に揺られて、雪深い地へのえんえん30時間に及ぶ大移動は、新任の先生にとって、期待に漲る新たな門出というよりは、まさにご家族との生き別れの悲壮感が漂うものであったらしい。そのような覚悟で臨まれたのではあったが、しかし、20代半ばの若い先生と北海道の素朴な学生たちとの交流が牧歌の様相を帯びるのにはきっと時間はかからなかったであろう。彼らに誘われて共に銭湯へ出掛けられたり、酒宴で朝まで文学と人生について熱く語り合ったりしたと、その頃を先生は実に楽しそうに、懐かしく振り返ってお話しになられたことが幾度もある。最近でもそうなのだが、その当時も、「夜のドイツ語」と称して、少々聞き召しつつ、学生たちと読書会などをよく催されていたらしい。僕の想像では、先生を慕い取り巻くこの学生たちの中に、後の岡光夫人がいたはずなのだが、そのあたりのことは、先生は黙してお話しになれない。他人の異性関係についてはしつこいほどの好奇心を示されるのに、ことご自分のことになると、もはや「空気のごときもの」となられたというロマンスの種明かしを決してなさないもので、艶っぽいことに関して先生は根っからシャイなのであろうと思っている。ともあれ、「生き別れ」を覚悟して臨まれた遙かなる大地から8年後、伴侶をともなって母校山口大学にお帰りになられた時は、恐らくは感無量の面持ちではなかっただろうか。

それからの30年のうちの、三分の一にも満たない時間を僕は先生と同僚として過ごしただけなので、だから岡光先生の教師生活の晩年を、息子ほども年の

離れた人間としてわずかに観察したことを記すことができるに過ぎない。あえて想像を交えて書くならば、僕の知る通り、先生は毎年トーマス・マンについての論文を発表されるかたわら、学部の運営、学生の指導と、実に精力的に活躍されたはずである。こと論文となると、毎年、春の連休と夏休みの頃は、この『独仏文学』の締め切りと執筆経過とを口になさるので、どうしてそれも脅迫観念的にお書きになられるのか、そういう観念に乏しいこちらとしては、なかなか理解がゆかない。しかも、一本ならまだしも、二本も書かれることがあるので、この生産力には敬服する思いである。多分、ご実家が農家で、ご自身も毎年田植えから刈り取りまでの世話をなさるので、そのような農耕的な収穫のリズムが論文生産にも反映されてあるのではなからうか。先生のお仕事のリストは、この号の略歴にも、また、今年の『ドイツ文学』の、トーマス・マン没後50年記念の書誌にたいそう載っているの、ご興味のある方はお目を通して頂ければ幸いである。

学部の運営に関しては、まさに人文学部の生き字引の感があって、あらゆる案件に、忍者のごとく関与されておられる。ひとそれぞれの思惑と、細かな事務の規則とが絡み合うという難所にあつて、じつに巧みに解決の糸口を見いだされるのであるから、これはただただ感心するばかりである。よくもまあ細かな事務手続きに通暁しているものと、少々あきれることもあるのだが、新任の僕がわからないこと、納得の行かないことは、先生に相談すればほぼ解消するので大変に便利であった。また、折々にこちらが理詰めで説くことを、先生は結論までは導かない中途の段階に整理しておいて、それをたいがい時間の経過の中にゆだねられる。すると、当該の案件について進むべき方向のちにおのずと定まってから開けてくるので、無駄な骨折りをせずにすむという案配になる。先生のこうした姿勢に特徴的な、現実の問題に対処するうえでの必要なねばり強さと、程よいあきらめの良さが、人文学部のプレーンとして長く重用された理由なのではなかっただろうか。無論、そこには人間とその行為とについての卓越した理解と洞察力が前提とされているのであって、この点で、岡光先生は人生の達人と言わねばならない。

ねばり強さとあきらめの良さ、これは彼のもつ農耕的特性の表現そのものなのではないだろうか。それは先生の精神と肉体の健康さ、強靱さと表裏一体である。先生は小柄で、冬などはコートが歩いているように見えるのだけれど、病気とはまったく無縁だし、ソフトボールの打撃力には目を見張るものがある。かつては人文学部の同士たちと共に「ブルーハンターズ」なる少々いかがわし

い名前をもつソフトボールチームの主力を務めておられたそうで、ポジションはサードだったのだから、やはりしなやかな運動神経を持ち合わせておられるのであろう。ただ、アキレス腱を切られるまで熱中された由で、これには開いた口がふさがらない。いまでも時々学生を集めてソフトボールをなさるのだが、近頃とみに女子大と化してきて女性ばかりとなった独文の学生たちにも、手取足取り腰取りお教えになられる。われわれ若輩とは違って、とにかく不健康な邪念とは無縁というのが、先生の健康と、また人気の秘密なのだろう。

そして先生は、学生はもとより、教師も含めて若い人がとてもお好きである。学生たちとドイツ語、そしてドイツ文学を学ぶ機会を持たれるのが本当に生き甲斐のように見える。だから、授業の準備などはいつも念入りで、翌日に講義のある日は、いつも研究室で夜遅くまで過ごされる。夕刻訪ねていくと、茶菓子をを出してくれて雑談にいつまでも応じてくれるのだけれど、夜の湯田温泉への誘惑を試みるわれわれに流されることなくまた勉強に戻って行かれる。「学生は裏切るもの」と教えられたのは先生からだ、しかし、先生の教育に対する情熱は失われることがない。いや増すばかりであろう。スポーツ観戦をのぞけば（ちなみに彼は阪神ファンである）だいたい先生は無趣味な人で、ドイツ文学と山大独文のほかにここを傾ける先をあまりお持ちではない。この点、選手引退後の生活が少々心配ではある。

岡光先生は本当に長い間、山口大と独文のために専心されたと思う。学生たちも口にするのとおり、彼は最初で最後の、「ミスター山大独文」である。若輩ながら、岡光先生と同僚として仕事をする事ができて、とても楽しかった。また実に多くのことを先輩教師・学者としての先生から学ばせて頂いたと思っている。僕のように感じている人間はきっと多いことだろう。岡光先生、本当に長い間ご苦労様でした。

最後に、岡光先生との思い出をひとつ記しておきたい。

ひょんなことから先生とは少々疎遠だった年の夏休み、僕は論文執筆のため家にずっと閉じこもっていた。そうしたある晩、先生が官舎の拙宅にぶらりと訪ねてこられたことがある。夜9時過ぎのことで、温泉につかれた帰りの先生は半ズボンにサンダルの出で立ちであった。手には缶ビールの入った袋をぶら下げておられて、きっと無沙汰を解消されるために、先生の方からこうしておとなわれてこられたわけである。それは本当は僕の役目であったはずなのだけれど、田舎暮らしのさまざまな不満不愉快を全部論文執筆にぶつけていた僕は既にそこに思い至らなくなっていた。いろいろと話をしたのだと思う。僕の

家にあるビールの買い置きもなくなってから、われわれは近所のファミレスに移動して、さらに午前2時の閉店になるまでそこに居座っていた。岡光先生は決してたくさん飲まれる方ではない。生中二杯が適量であり、コンパでも雰囲気の方が好きである。しかし、その日はめずらしく深酒をされたと思う。なお飲み足りなかったわれわれはコンビニへ行ってビールとつまみなど買い足してから、そこの駐車場に座り込んで酒宴を続行したのではなかったか。都会と違って別にそれで誰かから注意をうけるわけでもない。車も人もほとんどやってこない。夜風に当たり、缶ビールを直接口に運びながらもはや語ることもなく、星空を見上げていた。すると、あれは何という星かと、ひときわ大きく赤く輝く星を先生がゆび指して尋ねられるので、あれは火星ですとお答えした。その晩は6万年に一度、火星が最も地球に接近する日で、マルスは天空にともしたマッチ棒の焰のようにあかあかと燃えていた。夜明け近くになって先生は、もう家は閉め出されたから帰れないと仰るので、ふたたび拙宅にもどり、お泊りいただくことにした。せんべい布団の上に横になった先生に、薄い夏用のタオルケットをかえてさしあげると、先生はすぐに寝入られたように思う。うちに訪ねて来られたのは、あるいはひょっとして夫婦喧嘩でもして、奥さんのもとに今晚は帰りづらかったためではなかったか、などといふ想像した。

あくる朝早く先生がそっと玄関を出て行く音で目を覚ました。その日、次のようなメールが届いたと記憶している。

「坂本さん。岡光です。昨晚はお世話になりました。

おねしょをしていたらいけないので、布団は干しておいてください。それでは。」

火遊びをすると夜おねしょをすると、子供の頃、親にしかられたことなどふと思い出した。

(了)